

背負った子に教えられる、 おやじはボチボチやっています

きつかけは「酒でも呑んで話そうよ」

町田おやじの会(東京都町田市)

障がいのある子をもつ「親の会」は世間にたくさんあります。でも、そのほとんどがなぜか「母親の会」。とくに「男子禁制」と謳ったわけでもないのに。父親の会はないものかと探したら、ありました。「町田おやじの会」。町田市在住の障がい児をもつお父さんたちの集まりです。

ほんとに「呑むだけの会」なの？

小田急線町田駅からバスで15分ほど、閑静な住宅街にあるちよつと古い農家。野菜畑もあり、のどかな感じがとてもいい。敷地にはブランコやすべり台など、子どもの遊具施設も備わっています。今日はここで「町田おやじの会」のバーベキュー大会があるのです。ちよつと、準備の真っ最中で、鉄板には肉や野菜、トウモロコシ、



『町田おやじの会』の代表、平井秀夫さん。

エビ、イカなどが山のようにのせられ、白い蒸気が立ち上がり、香ばしいタレの匂いが鼻と胃袋を刺激してきます。

「おやじの会」というだけあって、鉄板の周りを囲んでいるのは大人の男と子どもたちが多いのですが、そのなかに女性が数人混じって、動きはこちらのほうがテキパキ。

「町田おやじの会」はただ集まって呑むだけで、ほかに何もしないという触れこみでしたが、ところが聞くと、「こういうイベントは年に1回だけです。去年おや

じバンドをつくって子どもたちと一緒にバンドフェスタという演奏会をやりましたが、それだけ。あとは2カ月に1度飲み屋に集まってただ呑むだけ」と代表の平井秀夫さん。どうやら、ただ呑むだけというのは謙遜で、それぞれが独自に子育てに取り組み、地域での活動にも参加されている様子です。バンドフェスタにドラマーとして参加する杉本陽之さんはこう言います。「子どもたちの中には家で独りきりでギターを弾いている子もいるんです。彼らには発表の場がない。ぼくらのおやじバンドと一緒にやろうと呼び掛けたら喜んで参加してくれました」。

杉本さんはビジネスマンとして働きながら、障がい児のスポーツ教育指導員もやっています。「ただ呑むだけ」じゃないですね。

一瞬、神を恨んだけど

「障がい児の親父たちが雁首そる



“ただ集まって呑むだけ”を標榜する『町田おやじの会』の皆さん。皆さんが障がいのある子どもさんを持っています。



山下久仁明さん。
NPO「はらっぱ」理事長。

えて、呑みながらどうでもいい話をする。その光景自体がネタとして成り立つ」

と、映画の名セリフのようなことを言われたのは、実際脚本家であり、映画のプロデューサーでもある山下久仁明さんです。実はこの名文句、13年前の「町田おやじの会」の結成宣言なのだそうです。山下さんの長男ヒロキくんは重度の自閉症です。

「ヒロキが生まれて自閉症だとわかったとき、いままで散々無視しやがったくせに、こんなときだけ普通と違うプレゼントしてくれやがって。と、その存在さえ信じていない神を恨みました」

なかなか芽が出なかった若き修業時代、山下さんは信じていない

神を呪っていたんですね。「でも、それはいい。どだい、オレは神なんかいないと思ってるんだから」と納得していたのでしょうか。

だから、ヒロキくんが生まれたときは「それはないだろう!」とまた神を恨んだ。しかし……。

「公民館主催の『障がい者青年学級』の開級式に初めて参加したとき、会場に入った途端、私は壁に張り付き、動けなくなっていました。成人した100人を超え、障がい者たちが歌ったり、踊ったりしていたんです。こんな世界があるなんて、想像もしていなかった。全然違いました。みんな生き生きしていた」

そして、こう思ったそうです。「うちの息子だって、結構、楽しく生きていけるんじゃないか、えーのかなあ」。この瞬間、生涯ブータローを自称する山下さんの人生が180度変わってしまいました。実はこのバーベキュー会場の農家は山下さんの実家です。住んでい



おやじさんたちがつくるものは、なんでもうまい!



ご自分のお子さんではないのに、ずっとだっこしてました。

た親たちには新築した家に移り住んでもらい、「つくしんぼ」という障がい者の放課後活動の場として提供したものです。

「明らかに他人と違う普通でない何かをやっているという快感がありました」。山下さんはヒロキくんのおかげで、これまでと違う世界で、それまでの人生では得られなかった質の歓びを味わうことになったのです。ヒロキくんは、やはり神のくれたすばらしいプレゼントでした。

妻は「戦友」です

ちょっと遅れて作曲家の椎名邦仁さんがやってきました。椎名さんはJR東海や大手食品会社のC

Mなどを手掛け、今はNHKの「100分de名著」の音楽担当です。椎名さんには2人の障がいのある子どもがいます。

その椎名さんが「おやじの会」に参加したのは、平井さんたちがつくった『「障害児なんだろう子」って言えたおやじたち』(2004年/ぶどう社)を読んだのがきっかけです。「とても力づけられたんです。これはぜひ、のぞいてみたいと」。

2人のお子さんをかかえて、奥さんも並大抵のことではないですね、とたずねると、「妻は一日中、インドレスで子育て。地獄ですね。だから自分も精いっぱいと思うんです」。ところがある日、椎名さんは妻にこう言われました。「今

「町田おやじの会」への連絡は下記HPからお願いいたします。

<http://machida082.com/>

のあなたは目前のことへのめり込み過ぎ。それは私にまかせて、あなたは未来のことを考えて、子どもたちの将来のビジョンを持つて」と。「ガクンと後頭部をぶんなぐられたような気がしました。まあ、妻は戦友ですね」。

パーティーは佳境に入り、こちらもノンアルコールビールをこちそうになりながら、トウモロコシをガブリ。

「おやじの会のバンドはとてもいい音を出します。僕は音楽をやっているから分かるんですが、普通のバンドとは違う、心にひびく音が出せるんですよ」と椎名さん。最後に「自分が成長させてもらっ



ドラマー杉本陽之さんご夫妻。

たんだなあ、ほんとうのところ」

と胸の内を明かしてくれました。

なんか、脚本家だったり、作曲家だったり、特別な人ばかり紹介しているようですが、メンバーには

もちろんふつうのビジネスマンも、あるいはお医者さんもいます。システムエンジニアだった小宮哲さ

んは、子どもの誕生をきっかけに会社をやめ、理学療法士の夜学に

4年間通って国家試験に合格。ただその4年間は無収入、生活でき

るのかと悩んだそうですが、「わたしに、まかせとけ!と妻が言っ

てくれたんです」と小宮さん。ビールが入って赤い顔をした代

表の平井さんがその話を聞いていて、「奥さんが偉いんだよな、あ

なたんところは」としきりにうな



椎名邦仁さん。
作曲家です。

づいています。小宮さんは今、介護老人施設で働いています。小宮

さんもまた、生き方を大きく変えたひとりです。

「障がい児なんだ、うちの子」
つて言えたとき

一人ひとりの「おやじ」にこれ

だけ多様な物語がある。不思議なのは、どなたの話も少しも鼻につ

く美談に聞こえないところです。ただソクソクと、こちらの胸に言

葉が浸み込んできます。そしてみなさんは、「障がい児なんだ、う

ちの子」つて言えたときから、生き方や価値観を大きく転換させ

たところで共通しています。「子どもの背を見て育ったおやじた

ち」といつては失礼でしょうか。このおやじさんたちの話をもっと聞きたい。こつちも「町田おやじの会」に入会したくなりました。「おやじの会を結成して13年、みんな子どもが大きくなりました。むかしほど、子どもにも手がかかりません。これからのおやじの会は、同じ境遇にある若い人たちを支えていく活動をしようかなと。あ、といつても、たいそうなことをするわけじゃありませんよ。一緒に吞んで、話をするだけです」(山下さん)。



小宮哲さん。
作業療法士です。



*上記の本は『「障害見なんだうちの子」つて言えたおやじたち』(ぶどう社・1,500円)。